

大学外国語教育管見

CEGLOC外国語教育部門長 久保田章

レポートに「ぶっちゃけ〜と思う」と書いたり、「マジですか」と反応していた学生たちも、就職のことが眼前にちらつく頃になると、自分の言葉遣いや母語（日本語）の知識のことが気になり始めるそうです。あるいは世間では「話し方講座」が満員になったり、言葉遣いに関するマナー本がベストセラーとなっています。

母語であれば、自分の言語能力を意識しなくても、日常的には不自由なくコミュニケーションが取れているはずです。それにも関わらず、これらのことは、たとえ母語であっても、ただコミュニケーションしているだけでは身につけることのできない言語の知識や技能、言うなれば「大人の言葉遣い」に関する能力の重要性を示していると解釈できます。

母語でさえこのように一筋縄ではいかないのですから、外国語となれば尚更であることは言うまでもありません。さらには、大人の言葉遣いと言っても、母語のものの言い方を単純に外国語に置き換えれば済むわけではないので、いっそう注意が必要です。それぞれの言語には、その言語の社会的・文化的規範があり、言葉遣いのマナーが一致しないことも多いわけです。ある状況において「適切に」言葉を用いることができないと、「意図したことが伝わらない」だけでなく、「意図しないことが伝わる」危険があります。

ここでは、英語における「謝罪」という言語行為を例に挙げます。謝罪は円滑な社会生活を送るのに必須で、国際コミュニケーションにおいても非常に重要ですが、英語には英語の、日本語には日本語の標準的な謝罪の仕方があることがポイントです。以前、英語の謝罪の仕方について調査したことがありますが、ある学生の回答は、「道で肩が相手に触れたとき」は“Sorry.”で、「相手の持ち物をうっかり壊したとき」は、“I'm very sorry.”さらに「自動車をぶつけてしまったとき」は“I'm very, very sorry.”（だけ）でした。中学や高校では、“I'm sorry.”や“I apologize.”などを謝罪表現として習いますが、一般にそれ以上の指導は受けていないと思われるので、一概に学生の責任というわけにもいきません。

当然ながら場面や状況にもよりますが、英語では、ある程度重要な事柄であれば、一般に謝罪の最後に「このようなことが再び起きることがないように注意する」旨の「約束」を加える必要があると考えられています。詳しく述べる余裕はありませんが、まず“I'm sorry.”のような「陳謝」に始まり、“It won't happen again.”のような「約束」によって終結する一連の談話を構成することで、はじめて「謝る」という所期の目的が達成されるわけです。日本語文化ではこのような約束は必須ではないため、学習者が英語で謝罪する際に齟齬が生じ、「意識せずに」相手の感情を害してしま

うことがあります。定型表現を使えることが外国語の学習ではないことを、大学生には気づいてほしいところです。

以上のように、単純な言葉のやりとりとは異なる次元で語られるべき実質があるわけですから、大学における外国語の学習においては、特に、すべての人が学習経験を有する英語では、単に意思疎通ができるというレベルを超えて、社会人あるいは大人にふさわしい言語の能力を習得することが期待されます。この能力は、また「異文化対応力」の一角を成すものですが、付言すると、指導の際には学習者の母語と外国語の双方に目配りできる必要があります。したがって、外国語のネイティブスピーカーなら誰でも指導できるという代物ではないことにも留意すべきです。

外国語の学習にはもうひとつ重要な側面があります。あるニュース番組の中で、南米から移住してきた家族の子どものことが話題になっていました。本人は日本で生まれ育っており、両親の母語であるポルトガル語よりも日本語の方が堪能で、親とよりも、むしろ友人とのやりとりの方が活発とのことでした。当然ながら日常の会話は問題なく日本語で行うことができるのですが、それにも関わらず、中学2年生の頃から教科書に書かれていることを理解するのが困難になったことを悩んでいました。この問題には、J. カミンズというカナダの心理学者が提唱した BICS と CALP という有名な2つの言語能力の区別が関係しています。前者は Basic Interpersonal Communication Skills (基本的対人伝達能力)で、日常的で具体的なコミュニケーションに関わり、特に音声言語によるやりとりを通して獲得されます。それに対し後者は、Cognitive Academic Language Proficiency (認知学習言語能力)で、高度な認知力や抽象的な思考力を伴うもので、主に文字言語が関係し、前者よりも発達に時間がかかるとされています。カミンズはこの区別をバイリンガル(2言語併用)教育の枠組みの中で論じており、上の事例はその典型ですが、日本における外国語の学習にも当てはめることが可能です。

さらに、新井紀子著『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』(2018年、東洋経済新報社)によれば、最近の日本の中高生では、母語である日本語にも関わらず、同様の現象が起きつつあるとのこと。従来、少なくとも母語であれば、CALP、具体的には文章の読解力は、指導する側もされる側も教育の過程で自然に身につくと思っていたわけです。しかしながら、コロナ禍の真っ最中に、「外出自粛と言われても、どうすればよいかわからない。ちゃんと指示してくれないと困る」と真顔で街頭インタビューに答えている若者を見かけると、読解力どころか、もはや事はもっと深刻ではないかとさえ思わざるをえません。現実問題として母語の場合ですら危機的状況にあるとなれば、外国語における CALP の指導など、それ自体が絵空事になりかねません。母語と外国語の重層的な学習言語能力の指導体制をあらためて構築する必要があると示唆されます。

情報伝達に留まらない、思考を媒介するという言語の機能を重視した外国語の指導は、大学においては、いわゆる学術言語の指導と直結します。学術的読解力と言っ

でも、ただ論文のような説明的文章を読んで要点を理解できればよいというものではありません。確かに「Aと書かれているものをAと読み取る」こともそれはそれで重要で、TOEFLやTOEICのようないわゆる外部試験が求めるのも、そのレベルの読みです。論文などの説明的な文章は、内容を一義的に伝える必要があるので、誰が読んでも等しく理解されることが前提です。そうなると、研究分野によってはむしろ無色透明の文の連鎖が好まれ、著者は居ても居なくても構わない存在かもしれませぬ。繰り返しになりますが、そのような文章に対する接し方も可能です。しかしながら、文章を「読み解く」こと、あるいは、もう一步、二歩「深い」読みを目指すならば、どのような意識が必要でしょうか。結論的に言えば、見えない著者との対話を行うことです。単純に「AをAと読む」だけでなく、この著者は「Aと書いているが、なぜAと書いたのか、どうしてBと書いていないのか」などと考えながら読む訓練を積むことで、単に表面的な意味の理解を越えた、より深い認識へとつなげることができます。

そして、そういう読み方を経験するのに最も効果的な方法は、文学作品に接することです。外国語の学習は、形式と意味と用法の「関係づけ」とも言われますが、文学作品は文脈（コンテクスト）上、この3者をどう結びつけるべきかを常に意識する必要があり、その方面の訓練には最適です。学生時代、私は文学専攻ではありませんでしたが、英文の読み方の真髄は英文学の先生から教わりました。「著者の顔が見えるように読む」というのがその先生の指導方針で、文章を本当に理解するためには、著者の生まれ育ちから当時の生活状況、社会環境に至るまで、実に多くの「書かれていないこと」に意識を向ける必要があることを学びました。書かれている字面の意味内容を理解するのに四苦八苦していたのでは、到底たどり着けないレベルです。文学作品も、そういう異次元の読み方を経験することが肝要です。深く読む経験を積んだ人にとって浅く読むことは簡単にできますが、その逆はありません。

大学の外国語の授業では文学作品の講読に対する風当たりが強いことは承知しています。しかし、何を読むかではなく、どのように読むかが問題なのです。説明的文章であれ何であれ、それを書いた人は必ず存在しています。「文は人なり」と言われますが、その著者の人となりまで思いをめぐらすと、著者自身も気づいていない、その人のものの見方や価値観が見えてくることがあります。そういう文章への接し方を知っていると、そうでないのとでは、読みに質的な違いが出るのは当然で、その結果見えてくる世界も異なります。新たな認識や知の発見の可能性も大きく増えるはずで。

実社会に出ると、一般にはこのような読み方をする時間も余裕もなくなることでしょう。だからこそ、学生時代に見えない著者と一度でも真剣に対峙することは、必ずや後々の糧になります。さらに言えば、このような高次のレベルの読みは、学習者が個人では会得することができないものなので、作品に精通した専門家の手ほ

どきを受けるのが最も効果的です。講読の授業の価値は、このようなところにもあります。

以上、大人にふさわしい外国語のコミュニケーション能力と深い読解力は、単なる日常的なやりとりや字面通りの意味の読み取りの延長線上にあるのではないということを書きました。これら2つの能力は、大学の外国語教育において重要な位置を占めており、とりわけ中学・高校での学習を土台とする英語教育では、その両輪とも言えるものです。